



北海道 炭鉱(ヤマ)の軌跡

大谷和男 著

北海道の夕張炭鉱に勤務した時の経験をもとに、自叙伝も兼ねて、夕張新炭鉱で起きた大事故(ガス爆発事故で93人死亡)を検証し、新炭鉱の閉山という悲劇への道を辿らなければならなかった、政府、業界、労働組合、夕張市、夕張市民の苦難の足跡を辿ると共に、日本の唯一の自給エネルギー源を放棄せざるを得なかつた痛恨の出来事を通して、現在・未来へのエネルギー問題を、石炭がエネルギー源としてを見直しされつつある現状を踏まえて、未来への展望を描く。

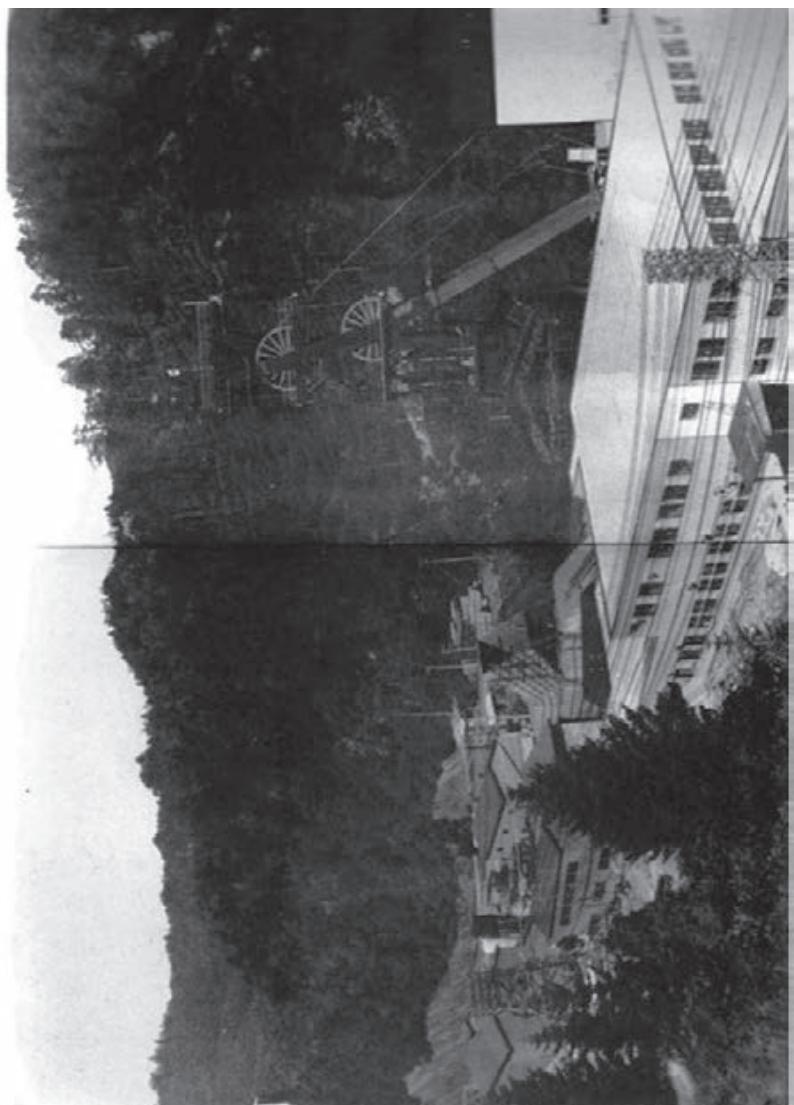


営業出炭頃の

清陵町と宮前町

夕張新炭鉱が営業出炭していた頃の清陵町と宮前町全景

夕張新炭鉱郊外施設・事務所全景



昭和 34 年 3 月 24 日、この日、いまからさかのぼること 46 年前になるが、この年大学を晴れて卒業し、北海道炭礦坑汽船という会社に就職が決定し、その日、東京日本橋の本社に出頭した後、赴任地である北海道の夕張にむかう十数人のグループが、東北線の青森に向かう特急『はつかり』の車中ではしゃいでいた。しかしほんどの人が都会の出身でありこれから一生、最果ての地夕張の山の中で暮らすことを思い、後ろ髪をひかれる思いもあったろうし、うれしさ半分の複雑な心境ではあったろうが、希望に胸をふくらませて、長い汽車の中の一時を、皆で語り合いながら、時のすぐるのを忘れていた。その中の一人が私であった。

思えば人の運命ほど分からぬものはない。この中のだれも運命の先行きを想像だにしたもののはいなかつただろう。そして世の中の、きびしさなど若輩の我々には知る由もなかつた。しかし、これらの若者は、厳めしい就職戦線を突破し、石炭産業は斜陽産業といわれはじめていたが、すくなくともこの時点においては、押しも押されぬ優良会社で通っていたので、この会社に入ったことに満足し、少なくとも他の若者より、恵まれていることを思い、汽車のなかは、華やいだ気分が充満していた。

あるものは、横浜のシュウマイを持ち込んで「これがシュウマイの食べ納だ!」といつて一人一人にそれを勧めていた。

また将来の嫁さんの話になると、「夕張にいる先輩の話によると、昼間に夕張に着いたのでは、山の中の最果ての土地を一目観ただけでも、こんなところで生活かることに、恐怖を覚え、すぐ帰ってしまうだろうから、夜、夕張の町に着くようにしなければならないといって、注意してくれた」という話を持ち出していた。夕張の炭住街は、夕張川の沢の傾斜地に密集してたてられており、一応大きな町を形成していた。夜間この炭住の明かりのこうこうと灯いた夜景は、神戸の夜景にも比較されるぐらいみごとであった。景気の良い夕張の象徴として、語り草になっていたのであつた。

この当時北海道炭礦汽船株式会社(以下北炭)には従業員が3万人位働いていた。職員だけでも5000人以上で、当時北炭13山といつて北海道の石狩炭田の中に優良なヤマを13箇所持っていた。

この狭い夕張の沢だけでも、第一坑、第二坑、第三坑の三か所の採掘場所があり、その従業員5000人位の鉱員長屋と職員住宅が用意され、所狭しと、ヤマの斜面に建てられていたので壯觀であった。

さてこのようにして夕張の地に赴任するために、2日かかりで長い汽車の旅と、連絡船の船旅、再び函館からの汽車の旅、出だしから大変な思いをした。

特に私は、大学が九州であったから、本社では九州からの赴任旅費をもらっていた。確か2万円位であったと思う。初任給が10、240円であつたから、今でいえば40万位に相当することになる。

東京の本社には、新入社員が全員集められ、当時本社のあった三井三号館で社長同席のもとに、昼食会がもようされ、フルコースの洋食がふるまわれた。確かナイフとフォークが5本ぐらい左右に並び、ちょっと戸惑う位の御馳走で、次々に料理が運ばれてきた。今までの長い人生でこれだけの会席にあづかったことはなかった。

この席で、萩原社長は次のように挨拶した。「世間では石炭産業は、斜陽産業のようにいっているが、こと当社に関しては、それはあてはまらない。当社の産出する石炭の6割は、コークスになる粘結炭であり、製鉄業、ガス製造業には欠くべからざる原料炭であって富士製鉄(現新日本製鉄)、東京ガスに引き取られているものである」と。

この年入社した学卒は、40名をこえていた。ようやく日本も、敗戦の痛手から立ち直り、空前の高度成長期を迎えようとしていた。しかし当時、一社でこれだけの社員を採用する会社はそうなかったはずだ。

技術系の鉱山科で10名位、その他機械科、電気科はじめ建築科出のものまで採用していた。このうち10名位が夕張に配属された。勿論女子も採されていたと思う。北海道夕張に赴任する際には、北海道出身のものを除いた人間が同じ汽車で一団となって、まず札幌のある北海道支社に向かつたのである。

北海道支社は、大通り公園手前の、あの有名な時計台の隣に位置していた。まだ学生気分が抜けきらず観光気分であった。(この場所は北炭が後日、あの札幌グランドホテルを買収し、隣にホテルを増築するとき、隣の札幌市の用地とこの支社の土地を交換して、今のグランドホテルが建った)

さてここで私がこの会社に入るようになった経緯についてちょっと触れておこう。私は今の北九州市の戸畠にある九州工業大学という所の鉱山科に在籍していた。福井県の出身であるが、門司東高に在職していた叔父さんがいて、工業大学にいこうと思っていた関係もあり、当時の一期校の受験に失敗したので少し遠かったが、合格したので行くことにした。

鉱山科には、16人の同級生しかいなかつたが、鉱山部門の就職先は限られており、金属ヤマと、炭坑を業とする会社は当時では、炭坑の会社では大手、中堅で10社位(主なところで三井鉱山、三菱鉱業、住友石炭、宇部興産、九州の大手の明治鉱業、麻生産業、貝島炭坑、大日本炭鉱、松島炭坑、北海道の北海道炭坑汽船、太平洋炭鉱)位がめぼしいところで、金属鉱山の大手として三井金属、三菱金属、日本鉱業、古河鉱業、日鉄、同和鉱業等があった。その他、商社やセメント会社、ボーリングの会社等の会社からも求人があった。

炭坑は九州の筑豊炭田では閉山が始まっており、三池や高島、長崎の松島等のある九州ではすでにエネルギー革命の影響を受けつつあり、国も炭主油従政策から油主炭従政策に転換しつつあったが、まだ石炭増産は続いて昭和36年には5500万トンを出炭している。しかしこれらの会社の中には、求人のない会社もあり、16人の就職希望者に割り振っても、あぶれる者の出るおそれもあった。炭坑に行くのを嫌って、金属山やセメント会社を希望する者も多く、成績のよいものが優先的に割り振られた関係もあり、残った石炭会社も財閥系の大きな会社が次つぎに売れていくて、九州とは縁の薄い、北炭、太平洋炭鉱、九州の松島炭坑(長崎沖の松島という離れ島にあった)位しか残っていなかった。北海道は学生の時、実習で住友石炭の赤平坑に行ったこともあり、北海道に憧れていた。子供のころから父の赴任先の今の韓国の京城で過ごしたこともあり、遠くへ行くことに対しては抵抗はなかったのである。特に広大な大地や、素晴らしい景色に虜に

なりそうになっていたので、できれば一生を北海道で暮らしたいと思うようになっていた。

北海道炭礦汽船という会社は、財閥系の会社ほど一般にはしられない会社で、昨年に続いて求人はあったが、希望者はいなかった。しかもこの会社には、母校は九州に立地している関係もあり過去にあまり卒業生の実績がなく希望者がいなかった。そこで私が応募することになった。しかし他の会社のように合格する確率は少ないとだれもが思い、当時主任自在丸教授が太平洋炭鉱と松島炭鉱の3つをセットで試験を受けることを許可してくれた。

私としては北海道炭礦汽船に魅力を感じていた。まず最初に松島炭坑の試験があったがその結果の発表がある前に北炭の試験が東京の本社であり、その結果合格してしまったので、教授をとおして、松島炭坑も合格していたらしいが断っていただいた。炭坑会社への就職先は、三井鉱山、三菱鉱業、住友石炭、古河鉱業、宇部興産、明治鉱業、中興鉱業、それに私の北炭であった。

そのうち北海道に勤務するようになったのは、私と住友石炭の奔別鉱業所にいった西辻君の二人だけだった。

西辻君は北海道に在籍する同窓だけの、「エルム会」というのを作ることを考えてくれて、時々札幌で会うこととした。

さてだいぶ脱線したが、札幌から夕張に向かうことになった。ここからだけでも3時間ぐらいはかかったんだろう。

夕方までには夕張の沢にある国鉄夕張駅の近くの、選炭機の前に位置する前あたりの小高い斜面にある住初合宿という独身者だけの宿舎に入ることになった。夕張に配属されたのは、技術屋7人、事務屋4人の11人だったと思う。技術屋の内訳は、鉱山科4人、機械科1人、電気科2人、建築家1人であった。鉱山科の4人は、京都大学出の山本君、早稲田大学出の鈴木君、それに北大出の安達君、それに私の4人である。

4月1日から夕張鉱業所で1ヶ月位の研修が始まった。最初は事務屋さん、建築屋さんも加わっていたが、途中から坑内勤務になる技術屋の7

人だけになった。研修を担当するのは夕張工業高校出の研修課長であり、課長代理の人と組んで、われわれの世話を担当していた。

当時鉱業所は部長制をとっており、かなりの役職者が詰めており、夕張は北炭の中心的存在で、北炭のドル箱といわれ、ほかの山が全部赤字でも、夕張が黒字であれば、これを補ってあまりあると言われたぐらいであり、贅沢な人員配置がされていた。この課長は勿論、過っての現場の責任者の経験者であり、経験を買われていたのであろう。

この人が我々を「7人の侍」と呼ぶようになっていた。

研修の途中で室蘭にある富士製鉄と日本製鋼の工場の見学会にもいって、かつては北炭が製鉄業と製鋼業をこの地に起業した名残であり、いまでは石炭販売のお得意さんであり、何かにつけて歴史的に深い関係にあるこの工場を新入社員に見せて、北海道炭礦汽船という会社の歴史的重みを知らしめようとした配慮であったのではないかと思う。宿舎生活ははじまつたが、特に娯楽設備があるわけではなく、夜になると麻雀をやったり、集まってビールを飲んで騒いでいた。

時々現場実習というのも組み込まれており、まず主力現場である第2坑に見学に行くことになった。水平坑道を2キロほどトロッコ電車で進み、そこからまた2キロ位、人車斜坑を昇降機で降りて、炭層に沿った水平坑道(上添坑道という)を何百メーターも歩いてようやく採炭現場につくのである。当時第二坑は一区から、四区に分かれており、各区はそれぞれ左右に、2カ所の採炭現場(切羽という)をかかえており、だいたい全部で一日2000トンの石炭を産出していた。それぞれの区には、係長という肩書の責任者がいた。この日見学したのは第二区であった。こここの係長は、東大鉱山科(21年卒)を出た新進気鋭のエリートが配置されており、皆で挨拶に行くと、君たちの給料も産出する石炭の単価に含まれているのだから、と言われてまず気合いを入れられた。単純に500トンの出炭の責任者とすると、 $500 \times 30 \times 12 \times 6000$ 円となり、一年間で約10億の責任者ということになる。

夕張全体の出炭は5,000トンであったから一年間の生産高は100億に相当する。これから計算すると、当時の会社の全売上は、200億位であったと想像される。当時石炭1トンの単価は、キロ当たりの石炭の発熱量の

数字に相当し、カロリー当たり 1 円と言われていた。一般炭(燃料炭)は、1 キロ当たり普通 3800 カロリーであり、夕張産出の粘結炭は倍の 8,000 カロリーであったからトン当たり 8,000 円したのである。ここの第二坑の稼行炭層は 10 尺層といい、厚さ(炭丈という)1.5 メートル位で約 70 メートル位の区間の石炭を 1.2 メートル位の区間の石炭を進行 1.2 メートルだけを一方(8 時間の労働時間をさし、一日を 8 時間ずつ 1 番方、2 番方、3 番方(夜番ともいう)と呼んで、一番方は勤務時間は 7 時から 15 時まで、2 番方は 15 時から 23 時まで、3 番方は 22 時から次の日の朝 5 時までであつた。)8 時間で掘り進んでいくやり方で 2 交代で 1 日に 2.4 メートル掘り進んでいくのである。坑内は 26 度位あり、見学に歩くだけでも汗をかく。8 時間この現場で働くのは、重労働である。

汗をかきかき坑外に出て、きれいな空気を吸い、おてんとさんにあたる気分は、言うに言われない。このときの一服は値千金である。働いてきた鉱員たちは、今日も無事にしゃばに帰ってきたという感慨にふけるというのは、決して誇張ではない。坑内のいたるところからガス(メタンガス)が湧出しており、坑内では火気は厳禁で、タバコは勿論吸えない。坑内に入る時には、搜検といって、ポケットの中をタバコを持っていないか調べてからしか入坑させてくれない。

我々は見学を終えて、お昼頃には出坑して、宿舎に戻り、出勤簿は朝事務所で印鑑を既に押してきており、昼からは宿舎に帰って麻雀をしていた。まだ我々は学生気けておらず、会社もまだ、我々に対しては、特別待遇をしている雰囲気であった。

宿舎には特別な娯楽設備はなく、各人に与えられた 6畳の部屋で本を読むか、麻雀をやって時間つぶしをするしかなく、テレビはまだ宿舎には、設備されていなかった。

昭和 34 年といえば、皇太子殿下と美智子妃殿下のご成婚の年で、テレビブームのきっかけを作った年であるが、まだ一般家庭には、高嶺の花で、3 万円位していただろうから、サラリーマンの初任給の 3 倍であるから、今でいえば 60 万ということになる。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。